

統一的自己の生物学的起源

ヒト以前の動物の「自己」は、その身体を制御する脳の回路網の中に埋没されて散在している。そこから滲みだした部分が、さしあたって直近に存在する他者と共鳴し、他者と共鳴している自分を自己の中にある他者の視点をもって再発見することによって、ヒトにおける内省的で継続的な「自己意識」が芽生えたのではないだろうか。とすると、この新しい脳機能は、新たに偶然に生まれた神経結合による、とせざるを得ない。

そもそも、いったいわれわれはいくつの「自己」を持っているのだろうか。感情に突き動かされる行為、他者との即時的関係性に基づく行為、環境からの緊急要請に呼応する行為。これら各種の行為を担う別個の神経系それぞれに、その行為を発動する主体たる「自己」を想定することができる。脳内に分散して表現されていた各種の自己が、道具使用という偶発的行為によって連携し、ネットワー

クをつくって全体的な「統一的自己」を産み出したのではないだろうか。事実、われわれは、道具使用訓練によって、大脳皮質の異なる領域をつなぐ神経結合が新生されることを示した。これが、ヒトの自己意識の起源であり、人間精神の生物学的基盤、文明の謎を解く鍵かもしれない。

翻って、動物ではなぜこのようなネットワークが生まれなかったのだろうか。先に述べたように、自然の一部として環境と一体化した動物的自己は、その過酷な野生環境を生き延びるのに、統一を図る余裕も必要性もなかったであろう。ところがヒトになって、家族愛により、社会により、安全が保証され、好奇心による冒険を許される中で、内省的な統一的自己を産み出す余裕が生まれたのではなからうか。しかし、この安全な社会は、人間的「自己」の連関の産物でもある。鶏が先か、卵が先か。この輪廻を産み出す契機となったのが、先に述べた道具使用ではなかったか、と筆者は思いたい。

*1 リベットの実験
アメリカの神経生理学者ベンジャミン・リベットが発表した一連の実験。被験者に時間を示す動く点を見ながら自由に手首を動かすように求め、手首を曲げようとした正確な瞬間に点がどこにあったかを問うと、実際に運動をはじめる200ミリ秒前に意図を持ったと報告した。同時に運動の制御に関わる補足運動野から「準備電位」を計測すると、実際の行為の開始に約550ミリ秒も先立って生じた。



入来篤史 (いりき・あつし)
「人間とは何か」を知りたくて研究の世界に足を踏み入れた。動物種としてのヒトを人間たらしめる所以を考察し、それを実現するメカニズムを脳活動に求め、その実体を「物理的に観測し」、さらに「生物的に説明」することを目指して、研究に取り組んでいる。専門は神経生理学。

Part 2 新たな学問領域

人間の意思決定 ——心理学と経済学と進化学をつなぐ 亀田達也

北海道大学文学研究科行動システム科学講座教授

人間の行為を「決める」ものは何であろうか? 人間の意思決定に関する研究がかわりつつある。環境や適応といった進化学の視点を取り入れることで、新たな可能性が見えてきた。

私たちは、生きていく中で行為を選択している。こうした選択が意識的なのか、自動的に導かれた結果なのかは、とりあえず問わない。重要なのは、ある行為に「決める」ことが、ほかを選ばないことを意味する点だ。「決める」ことは、「決まる」という側面を併せもっている。社会の中で1人が選んだ行為は、ほかの人

間に影響をもたらす。つまり、「自分が決めている」ように見えても、実は他者が「決めた」結果に応じて、ある行為を選ばざるを得ないはめに陥っているのかもしれない。この結果、社会には、個人にとって望ましくない全体的パターン、誰が望んだわけでもないのに、そう「決まってしまう」パターンが生まれるか

もしれない。このように、人間の行為を「決める」、「決まる」という側面からとらえる考え方を、意思決定論と呼ぶ。人間の意思決定に関する研究は、心理学と経済学を中心に独立に展開してきた。しかし、過去10年ほどの間に両者を隔ててきた壁は溶解し、進化学との連携のもと、大きな統

見えども見えず——機能的MRIで見る色知覚

定藤規弘

総合研究大学院大学教授生理科学専攻/自然科学研究機構生理学研究所教授

見えども見えず。日常よく経験することである。これは、絶対に見えているはずである状況にもかかわらず、"気がつかない"状態をさす。その裏返しとしての「意識的な知覚」は、意識的な経験の構成要素と考えられている。見えども見えずの状況では、物理的な刺激と、それに関連する頭の中の「意識的な知覚」との間の暗黙の関係が破綻しているのである。その関係を形成する脳の活動とは何だろうか?

われわれは、色彩豊かな世界に暮らしている。目に届くのは、ある波長成分の光であるが、そこから特定の色の内的な経験(色感覚)を生み出しているのは、われわれの脳である。実際の色を見ているとき、腹側後頭葉領域が活性化することはよく知られているが、この領域が「意識的な色知覚」と直接かかわるのかどうかはまだ明らかにされていない。そこで、機能的MRI (functional MRI : fMRI) と呼ばれる脳機能画像法を利用することにより、色覚における「見えども見えず」の状況や、「意識的な知覚」を引き起こす神経基盤を調べる実験を行った。

fMRIは、ある部位の脳血流量の変化を神経活動のパラメータとして画像化し、まったく傷をつけずに外部から人間の脳活動を観察する方法である。

実験では、刺激を一定に保ったまま、異なる色感覚をつくりだすために、マッカロー効果と呼ばれる錯覚現象を用いた。マッカロー効果とは、たとえば緑色の水平縞とマゼンタ色の垂直縞というような補色関係にある縞模様(誘導刺激)を、交互に数秒ずつ合計数分間提示し、その後で白黒の縞模様(テスト刺激)を提示すると、縞の方向によって誘導時の補色に薄く色づいて見える現象である(図1)。

誘導刺激を提示する前後に、白黒の縞模様のテスト刺激を提示し、テスト刺激を見ているときの脳活動を fMRI で測定した。このとき、誘導後に色に注意を向けるようあらかじめ教えておく教示グループと、特に何も教えない非教示グループの二つのグループを設定した。実験の結果、マッカロー効果が被験者全員にほぼ同程度誘導されていたことが確認できた。ところが、

非教示グループでは、約半数の被験者は fMRI 実験の最中に色が違って見えることに気づいていたが、残り半数は気づいていなかった。つまり、約半数の被験者が見えども見えずの状況だったことになる。

このときの脳活動を見ると、実際の色刺激に対して有意な活動を示した両側の腹側後頭葉の中で、錯覚の色に気づいたグループでは活動が見られたが、気づかなかったグループでは活動が見られない領域があった(図2)。左側の第4次視覚野(V4)の前方領域(Anterior LV4)である。左側V4は色特異領域とされているが、その中でも前方のより高次元領域が「意識的な色知覚」に関与していることが示唆された。

このような脳機能画像法による脳機能解析は、バイオインフォマティクスの一例である。バイオインフォマティクスとは、生物学的データ解析に焦点をあてたコンピュータサイエンスの一分野であり、バイオ統計が重要な役割を果たす。脳機能画像法は、物理学、医学、工学、心理学、脳生理学、神経科学、統計学、コンピュータサイエンスなど、広範囲にわたる領域の相互作用により生み出され、かつては哲学的アプローチしかなかった領域(たとえば意識的な知覚)へと、その研究対象を広げつつある。ここではその一例を紹介した。

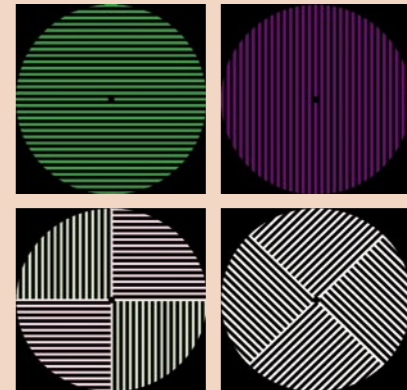
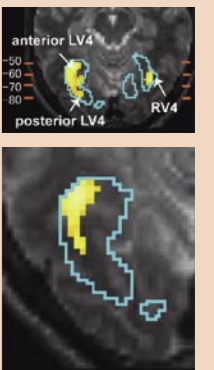


図1 マッカロー効果
マッカロー効果とは、縞刺激の方向にともなって起こる色残効現象である。上が誘導刺激、下がテスト刺激である。縞の方向により、誘導時の補色に薄く色づいて見える(左上)。テスト刺激の縞を、誘導刺激の縞の方向から45度回転すると色は見えない(右下)(McCollough, 1965)。

図2 錯覚色知覚(マッカロー効果)に対応する神経活動
マッカロー効果誘導後に白黒の縞模様を提示したときに見られる神経活動(写真上)。黄色の部分は、誘導前に比べて強い反応が見られた部分であり、マッカロー効果に対応する神経活動を示している。また、錯覚の色に気づいたグループでは、色中枢(左側V4)の前方部分(Anterior LV4)に活動が見られた(写真下)が、気づかなかったグループでは活動が見られなかった。(Morita et al, 2004)



1万円を手渡され、初対面の相手との間で自由にこれを分配するように言われたとする。相手が拒否した場合、双方の取り分は0になる。最後通牒ゲームと呼ばれるこのゲームで、最も多く見られるのはどんな分配パターンだろうか？



合の可能性が見えつつある。本稿ではこうした方向性をスケッチする。

最後通牒ゲームとホモエコノミクス

次のような意思決定場面を考えよう。実験室で、あなたと初対面の相手がペアにされる。あなたは実験者から1万円を手渡され、この金額を相手との間で自由に分配するように言われる。ただ一つだけ決まりがある。あなたが提示した分配方法に相手が納得すれば双方の取り分はそのまま確定するが、納得せず拒否した場合には、双方の取り分は0になる。「最後通牒ゲーム」(ultimatum game)と呼ばれるこのゲームを、ただ1回だけ、相手と役割を交換せずに行うとしよう。どのような分配パターンが見られるだろうか。

このきわめて単純なゲームは、世界各地のラボで何百回と実施されてきた。結果もまた単純明快である。日本やアメリカのような産業社会で実験を行うと、相手との間に平等の分配を行うというパターンが最も頻繁に観察される。

この結果を聞いて読者は「アタリマエではないか」と思われるかもしれない。しかし、この結果は、経済学の間人モデ

ルからすれば非常なおどろきである。なぜか。

人間が自己利得の最大化にしか関心のないホモエコノミクスだと仮定しよう。このとき、相手は1円以上のいかなる金額も受け入れるはずである。拒否してしまえば、それこそ元も子もなくすわけだから。あなたもホモエコノミクスとして振る舞う。あなたは、相手が1円以上のいかなる金額でも受け入れることを予期している。また、この相手とはゲームをただ1回しか行わない。したがって、あなたの提示する分配方法は「自分に9999円、相手に1円」となるはずだ。

もちろん、私たちはこんな“アンフェア”な分配は決して起こらないことを知っている。事実、上記の分配方法が典型的パターンとして選ばれる社会は、産業社会だけでなく、伝統的な部族社会や狩猟採集社会も含め、これまで1例も観察されていない。この意味で、こんな実験は「やってみるまでもない」と思われるかもしれない。しかし、本当にそうだろうか。経済学の間人モデルのうち、どの仮定を緩和すれば、平等分配が最も選ばれやすいという事実が説明できるかを

考えてみよう。

利他的人間像と独裁ゲーム

一つの考え方は、ホモエコノミクスモデルを完全に放棄し、「利他的人間像」を採用することである。人は相手の福利を考え、互いにとって“フェア”な平等分配を好む存在なのかもしれない。しかし、別の実験はこの考え方が正しくないことを示している。

先の実験手続きに少し変更を加え、相手の拒否権をなくしてみよう。あなたが提示した分配結果が、そのまま双方の取り分になるという手続きである(独裁ゲーム dictator game)。もし「利他的人間像」が正しいとすれば、あなたは、ここでも“フェア”な平等分配を最も選びやすいはずだ。しかし、実際の結果はそうはならない。先の最後通牒ゲームに比べ、あなたは自分の取り分を大幅に増やすのである(ただし、1万円を独り占めにするというホモエコノミクスモデルも当てはまらない)。

以上の二つの実験の結果は、相手の出方に関する予期があなたの行動を大きく規定することを示している。「相手は平等分配以外、受け入れないだろう」とい

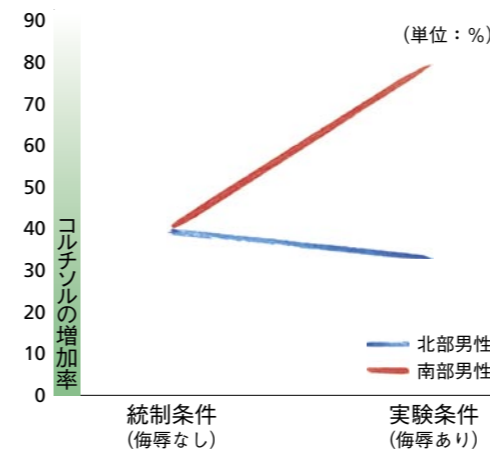
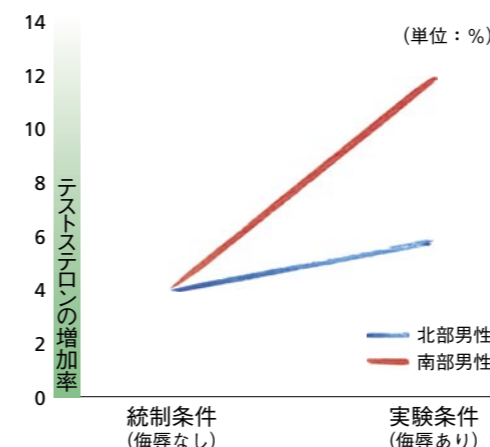


図1 侮辱に対する生理的反応
アメリカ人を対象に、他者からの侮辱を受ける場合と受けない場合、それぞれの条件での唾液中のホルモンレベルの変化を計測した。コルチゾルはストレスの大きさ、テストステロンは攻撃行動と関連するホルモンである。実験の結果、南部出身の白人男性は、北部出身の白人男性に比べ、他者からの侮辱に対して敏感に反応するという傾向が見られた。アメリカの入植史を見ると、北部にはヨーロッパからの農民が入植したのに対し、南部には牧畜民が入植した。南部出身の白人男性の侮辱に対する敏感さは、牧畜社会に共通して見られる、侮辱を許さない「名誉の文化」により培われたものと考えられている。(Nisbett, R., & Cohen, D. 1996. *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Boulder, CO: Westview Press.)



う予期を抱く限り、あなたにとって平等分配を選ぶことは合理的である。そうしなければ元も子もなくすわけだから。この意味で、相手の反応についての予期を所与とする限り、分配者としてのあなたの行動は、基本的にホモエコノミクス的である(ただし完全にはではない)。このように見ると、従来のホモエコノミクスモデルを大きく覆すのは、受け手である相手の行動である。実際、“アンフェア”な分配を提示された相手は、拒否権を発動することがきわめて多い。あなたの予期は正しいのである。

それでは、なぜ、相手は“フェア”な平等分配に固執するのか。同じペアで繰り返しゲームを行うのであれば、最初の数回だけ拒否してみせることは合理的かもしれない。しかし、ゲームを行うのは1回だけだ。なぜ元も子もなくすような愚かな行動をするのだろうか。

怒りの感情に流される意思決定

こうした状況で、相手が「感情に流されている」という見方は正しい。事実、脳イメージングの技法により、“アンフェア”な分配をされたときには、怒りや嫌悪の感情と関連する島皮質 (insula) が活性化することが知られている。しかし謎は残る。なぜ、怒りや嫌悪に駆られて利益を見送るように私たちは設計されているのか。進化学のロジックからすれば、こうした拒否行動は自らの適応に負の効果しかもたないように思われる。

いくつかの考え方があり。一つは、非合理に見える「怒りに流されること」こそ、実は長期的な利益をもたらすのだという説明である。“アンフェア”な分配を受け入れてしまうことは、少しだが直近の利益を確保する。しかし、そのことが「あの人間はカモだ」という評判を生んだらどうだろうか。将来にわたって同

様の搾取が起きることだろう。「怒りに流されること」は短期的な損失を生んでも、「タフな人間だ」という評判を通じて、将来における“フェア”な扱いにつながるかもしれない。興味深いことに、農業社会と比べ、牧畜社会で育った男性は、他者からの搾取や侮辱に敏感に反応しやすいというデータがある(図1参照)。警察力の働きにくい広大な土地で生きる牧畜民にとっては、家畜泥棒が深刻な脅威である。他者からの侮辱を許さず、1頭の家畜のために命をかける「男だて」は、長い目で見ればペイするのかもしれない。

こうした着想は、一見とらえどころのない感情の働きが、生態学的環境との関わりで巧妙に整備されていることを示唆する。現在、私たちのチームでは、経験サンプリングと呼ばれるフィールド調査技法と実験室実験を組み合わせることで、感情が一まとまりのパッケージとして適応に役立っている可能性を考えはじめようとしている。こうしたアプローチにより、社会規範の成立・維持といった、社会科学的問題への接近が可能になると考えている。

人間の意思決定をめぐる研究は、進化学のロジックを援用しつつ、既存の学問分野の壁を大きく飛び越えつつある。



亀田達也 (かめだ・たつや)
人間社会における「決める」、「決まる」というメカニズムの精妙さと複雑さに魅せられている。大学院では心理学のトレーニングを受けたが、分野を超えた「行動科学」をやりたい(名前は「認知科学」でも「人間科学」でも何でもよい)。進化学の視点では、分野の壁を飛び越えさせてくれる強力なエンジンだと思っている。